

少年犯罪に対する専門家とマスメディアの言説史

～凶悪化・動機の不可解さ・衝動性・メディアの悪影響・一般化～

History of discourse on juvenile delinquency by specialists and the mass media

小 沢 哲 史

問題と目的

近年、日本では、国民的な認識として、「治安の悪化」があり、「安全・安心」に対して強い関心が集まっている（例えば、内閣府、2004；野村総合研究所、2005）。しかしながら、犯罪の量的な増加や質的な凶悪化を裏付ける科学的資料を伴っていないことは、犯罪に関わる専門家の間で大勢を占める知見である（主たる論考として、徳岡、2000；河合、2004；浜井、2006）。むしろ現実の日本社会は、歴史的および世界的に最高レベルの治安状態にある。

犯罪に関するこのような事実と心理的イメージの乖離については対象を未成年者（以降、「少年」と表記する）に絞っても同様である。世間において、少年犯罪の増加、低年齢化、凶悪化などが叫ばれているものの、現実の少年犯罪は、増加しておらず、低年齢化しておらず、凶悪化もしていない（鮎川、2001；広田、2001）。今後、本論では、このような根拠となる事実を伴わない心理的な意味での犯罪に対する社会不安を「体感治安の悪化」と呼んで論を進めていくことにする。

この体感治安の悪化は、1980年代終盤に端を発し、90年代後半以降に日本社会を席卷したと考えられている。社会学者の河合（2004）、芹沢（2006）などによる論考をまとめれば、これらは、（１）宮崎勤による東京都・埼玉県の少女連続殺人事件（1988）、一連のオウム関連事件（1995）や兵庫県神戸市須磨区の連続児童殺傷事件（1997）、宅間守による大阪教育大学附属池田小学校連続殺傷事件（2001）などの重大事件の与えた恐怖感、（２）またこれらの事件に加えて、埼玉県桶川市の女子大生殺人事件（1999）、北朝鮮拉致事件、山口県光市母子殺害事件（1999）などにおける被害者遺族の苦しみへの社会的注目、（３）バブル崩壊に伴う労働経済的不安、（４）中高年層を中心とする高度情報化社会に対する不安が、この時期に互いを増幅する形で生じたからということになる。

補足するならば、(a) 恐怖感を与えた事件として東京都足立区綾瀬の女子高生コンクリート詰め殺人事件(1988)を加える必要があり、(b) 時代背景として、日本社会が成熟し、人々が物質的に豊かになり、精神的に繊細になったことを考慮する必要がある。さらに、(c) 子どもを被害者、加害者どちらにもしたくないという思いがしつけ、保育、教育に影響を及ぼしていることも見逃せない。

さて、このような国民の「体感」には、一般的にマスメディアと専門家の言説が影響力を持つことが広く認められている。特に、体感治安の悪化については、マスメディアの過剰報道を理由として考えることがある(例えば、鮎川、1988; 柳原、1992)。このことがおおよそ妥当であるとしても、なお追究すべき点があるように思われる。マスメディアの過剰報道を大別して量的なレベルと質的なレベルに分けるとする。情報化社会の発展という時代の推移によって量的に増えたことは当然としても、質的な変化ははたして見られたのだろうか。マスメディアの過剰報道は、体感治安の悪化の時期に初めて何らかの変質を遂げたのだろうか。時代をさかのぼっていけば、かつては少年犯罪について異なる言説が見られたのだろうか。この点について追究の余地があるように思われる。

そこで、本論文では多くの国民や一部の専門家が少年犯罪の近年の特徴と考えている「凶悪化(悪質化)」、「動機の不可解さ(動機の希薄さ)」、「衝動性」、「メディアの悪影響」、「一般化(中流家庭出身、ふつうの子、ボーダレス化)」に関する言説(以降、「凶悪化等の言説」とまとめて表現することがある)を、第二次世界大戦後を中心とする犯罪にかかわる専門家(警察関係者、少年鑑別所専門官、法学者、家庭裁判所調査官、社会学者、心理学者、精神科医等)の論文や著作およびマスメディアの近似的代表値としての新聞の記述の中に探し出し、確認することを目的とする。

このように専門家とマスメディアの双方に関して時代をさかのぼって調べた結果、質的共通点が見いだされるかどうかによって、四種の帰結が仮定できる。

- (1) 過去には、マスメディアと一部の専門家の双方に凶悪化等の言説が見られた。
- (2) 過去には、マスメディアのみに凶悪化等の言説が見られ、一部の専門家には見られなかった。
- (3) 過去には、マスメディアには凶悪化等の言説が見られず、一部の専門家のみに見られた。
- (4) 過去には、マスメディアと一部の専門家の双方に凶悪化等の言説は見られなかった。

これら四種の帰結と“体感治安の悪化”という社会現象を合わせて考察すれば、マスメディア元凶説の当否について異なる見解が得られよう。まずこの中で（２）はもっともありそうにない。なぜなら、マスメディアは、何らかの意味で取材源を求める傾向にあり、凶悪化等の言説をすべての専門家が示さない中でマスメディアだけが凶悪化等の言説を流布することは現実的に考えにくい。（３）のマスメディアのみに凶悪化等の言説が見られなかった場合、近年になって急速に社会不安をあおったことになり、マスメディアに誤った質的变化が生じたことになる。次に、（４）のように近年になって、急速にマスメディアと一部の専門家が凶悪化等の言説を流し始めたとすれば、双方に共通する変化あるいは圧力などを検討する必要がある。

最後に、（１）のように、マスメディアも専門家が過去にも凶悪化等の言説を流してきたとすれば、逆説的に近年の体感治安の悪化は、マスメディアや専門家の言説の量的氾濫は別として、言説を受け取る人々の心理的なレベルでの時代による変化も見逃せない要因としていことになる。本論文では文献調査によって、この点を明らかにしたい。

この項の最後に、一部の専門家による近年の凶悪化等の言説を補足として掲げておく。すでに述べた通り、一般的傾向としては、現代の少年犯罪が凶悪化しているという事実はなく、専門家の中ではすでに少数派である。また、その少数派の主張も控えめなものとなっている。たとえば、家庭裁判所の調査官の経験を持つ廣井（2002）は、「確かに、最近の非行少年の凶悪化現象は、特異な凶悪・重大事件の過度の一般化であり、社会統制機関やメディアが作り上げた一側面である。しかしながら、非行少年の臨床像には、青少年の凶悪化が虚像や幻想とはかならずしも言い切れない様相を呈している」と述べ、もはや凶悪化を明白には表現し得ない近年の学界の状況がうかがえる。

もっとも比較的強硬に凶悪化を主張する法学者の前田（2000）もおり、質的な凶悪化を主張する社会学者の間庭（1997）の場合、「今日では財欲や性欲はもちろん、怨恨や嫉妬など従来の要因ではまったく理解できない犯罪が常態化して来ている」と述べており、いわゆる「心の闇」言説に通じる記述と言える。

方 法

対象とした時代：第二次世界大戦後から、体感治安の悪化の生じた1980年代終盤までを対象とした。

手続き：文献調査。マスメディアの言説については、限定的ではあるが、朝日新聞記事データベース“聞蔵Ⅱビジュアル for Libraries”を用い、「少年&犯罪」をキーワードとして検索をかけ、ヒットした記事を調べた。

対象とした言説の種別：

本研究では「凶悪化」、「動機の不可解さ・希薄さ」、「衝動性」、「メディアの悪影響」、「一般化（中流家庭出身、ふつうの子、ボーダレス化）」を選択した。少年犯罪の質的側面に時代による凶悪化等の変化がないことを指摘した研究として、社会学者の高橋（2004）をあげることができる。高橋（2004）は、「凶悪犯罪の中流化」、「猟奇性」、「劇場性」、「動機の不透明さ・不可解さ」、「衝動性」のいずれの点においても1960年代前後に同質の事件があったことを具体的に指摘した。しかし、高橋（2004）の研究が、個別の事件を取り上げているのに対して、本研究はマスメディアや専門家が一般的傾向として指摘する質を問題にする。その場合、「猟奇性」は遺体損壊や局部への傷つけ、「劇場性」は犯行のマスメディアへの連絡と、具体的な行為がほぼ定まっており、神奈川県鎌倉市の少女殺害事件（1948）、東京都江戸川区の小松川女子高校生殺人事件（1958）、東京都杉並区の高校生通り魔事件（1963）、神奈川県川崎市の高校生首切り殺人事件（1969）、兵庫県神戸市須磨区の土師淳君殺害事件（1997）など、戦後の少年犯罪史において数えられる程度の特定の事件でしか起こっていない（参照：少年犯罪データベース）。したがって、マスメディアや専門家の少年犯罪に対する一般的傾向に関する言説を検討する本研究では、特定の事件への形容としての「猟奇性」「劇場性」は対象としなかった。

一方で、インターネットや携帯、アニメなど相対的に新たなメディアの少年犯罪との関連に関心がもたれがちであることから、当時の新たなメディアである映画やテレビなどが少年犯罪に影響しているという「メディアの悪影響」言説を対象とした。

結 果

1. 凶悪化（悪質化）

1－a. 専門家による「凶悪化」言説

現在をさかのぼる45年前、社会学者の伊藤（1963）は、「残虐味がある犯罪が増加している。」と述べている。また、同時期の社会学者、大橋（1964）も「少年非行が、こんにち、このように騒ぎ立てられるようになったのはなぜだろうか。それには二つの理由が考えられるが、一つは、何とんでも、少年非行が激増し、悪質化して、社会生活に多大な脅威と不安とを

あたえていることであり、…」と述べており、少なくとも1960年代に専門家による「凶悪化」言説があったことは間違いない。

1ーb. マスメディアによる「凶悪化」言説

一方、朝日新聞データベースからは、次のような見出しで「凶悪化」が報道されていることがわかった。

- 1958.9.18 「長期、嚴重に取締れ 激増と凶悪化の一途をたどる青少年犯罪」、
- 1963.9.11 「悪質化する少年犯罪 （事件をまとめて紹介）」
- 1964.5.11 「少年犯罪 凶悪化する一方」
- 1967.2.2 「少年犯罪凶悪化で 防止対策本部置く」
- 1969.4.8 「少年犯罪 新しい型 軽い動機 凶悪な犯行 （永山則夫事件を評して）」

興味深いことに、1970年代以降においては、個別の事件に対して「凶悪」という文字は記事に見られても、「凶悪化」を意味する見出しは見られなかった。「凶悪」が、「凶悪化」をイメージさせる可能性は別にして、そこには、事実に沿った何らかの抑制が加えられていた可能性もある。ただし、マスメディア全体として、1970年代、1980年代に凶悪化言説の流布がなかったと考えることは必ずしも妥当ではなく、筆者の調査が限定的であったためもあるう。

2. 動機の不可解さ・希薄さ

2ーa. 専門家による「動機の不可解さ」言説

まず、近年の「動機の不可解さ」言説について述べる。法務総合研究所の遠藤（1998）や家庭裁判所の岡本（1998）は、「今日の事件の具体的特徴」として、「被害者が死ぬとは思わなかったなど、結果の重大さと少年の認識とにずれがある」と述べている。さらに少年鑑別所の大浦（2004）は「非行動機が曖昧、不明でよく分らないと言われ出してから10年余が経過している」と述べ、あたかも近年新たに生じた現象であるかのように記述している。

しかしながら、すでに1960年代、当時もっとも著名な心理学者の一人であった宮城音弥は朝日新聞紙上において、「動機なき殺人が多いといわれる」と述べている（1966.2.6）。また、すでに引用した伊藤（1963）は、「無動機犯罪の増加」を指摘しており、これは「犯行の客観的に納得し得る動機がなく、犯行の目的物に対し、犯罪が過剰にすぎ、残虐味がある犯罪が増加しているということである。」と述べていた。さらに、同時期、心理学者の樋口（1968）は、「格別の理由ないし動機があるように思われない」と少年非行について指摘した。

また、法学者の板倉・沼野(1974)は、「別段の罪悪感を抱くことなく、安易かつ容易に敢行するというタイプの非行の増加」という表現で動機の希薄さも指摘している。同時期、刑務所に勤めていた新田(1978)は、「犯罪・非行の質的变化とその対策」と題したシンポジウムにおいて、「最近の非行・犯罪については・・・(中略)『動機なき犯行』が特徴であるとさえいわれている」と述べ、動機の不可解さは、決して近年に特有の言説ではなかった。

2-b. マスメディアによる「動機の不可解さ」言説

朝日新聞データベースからは、次のような見出しで「動機の不可解さ・希薄さ」が報道されていることがわかった。

1958.9.2 「小松川女子高生殺し 動機なき犯罪 無反省」

1957.2.3 「単純な動機から罪を犯し、そしてきわめて簡単に人命を奪っている(社説)」

1969.4.8(再掲)「少年犯罪 新しい型 軽い動機 凶悪な犯行 (永山則夫事件)」

1981.8.29 「ふえる少年犯罪 動機単純 欠く抑制」

3. 衝動性

3-a. 専門家による「衝動性」言説

心理学者の山本(1961)は、「長期犯罪少年は自己統制(特に感情統制、欲望統制)が弱い」と述べていた。次に、朝日新聞から、取材を受けた専門家において2つの「衝動性」言説を見いだした。

1966.1.28 「心とからだのアンバランスということだが、その結果として、衝動的に大きな犯罪を犯すケースがふえているといえるのではないか(警視庁防犯部 少年一課課長)」

1966.2.6(再掲)「(ある事件を分析しながら)他の考えがホームシックによる衝動にブレーキをかけることなく、意志の力が働かず、辛抱できなかったのである。このように青年期の異常な行動はいつの時代にもないわけではない。しかし、昨今、この種の青少年が加速度的に増加してきていることは事実である(宮城音弥、前述)」

3-b. マスメディアによる「衝動性」言説

朝日新聞データベースからは、次のような見出しで「衝動性」が報道されていることがわかった。

1967.2.8 「少年の衝動的な犯罪が目立っている」「衝動的・突発的な犯行が多い(コラム 今日の問題)」

1967.7.20 「ばくぜんとした不満があり、衝動的にとんでもないことをやり出す。(天声人語)」
1981.8.29 (再掲) 「ふえる少年犯罪 動機単純 欠く抑制」

4. メディアの悪影響

4-a. 専門家による「メディアの悪影響」言説

鮎川（2001）の引用した原（1921）や少年審判所の鈴木（1935）によれば、明治末期にすでに少年犯罪に対する「映画の悪影響」が主張されている。第二次世界大戦後においては、山本（1956）は、映画の青少年に及ぼす影響を論じ、さらに、この22年後、精神科医の福島（1978）が、「テレビ・マンガ・イラストなど映像による情報入力が幼児期から圧倒的に大きい」と述べていることが見いだされた。

4-b. マスメディアによる「メディアの悪影響」言説

朝日新聞データベースからは、次のような見出しで「メディアの悪影響」が報道されていることがわかった。

1958.3.4 「衆議院法務委員会 映画と青少年犯罪で参考人」とあり、50年前にメディアの影響が話題であったことがうかがわれる。

1962.9.7 「犯罪の性質も悪質化・集団化の傾向が強い。(中略) テレビの犯罪もの、スリラーものなどが、吸取り紙のような子どもの頭に毎日焼きつけられ、その刺激が積み重ねられていく影響も見のがせない。(天声人語)」

1965.11.2 「エログロ映画の弊害を防ぐため、映倫を充実、強化したい(文部相の発言紹介)」

5. 非行の一般化・中流家庭出身・ふつうの子・ボーダーレス化

5-a. 専門家による「一般化」言説

現在を約50年さかのぼり、犯罪白書の創刊号（1960）には、すでに「上流、中流層の少年の悪化」が記述されていた。その後、すでに引用した板倉・沼野（1974）「ごく普通の少年が、(中略) 別段の罪悪感を抱くことなく、安易かつ容易に敢行するというタイプの非行の増加」と述べており、「ごく普通の少年」という表現が近年に等しいと言える。

三度目の引用となるが、伊藤（1963）は、1949年から58年の少年犯罪の特徴を、家庭裁判所の調査官の森田（1961）の「一見問題のなさそうに見える家庭、学校、地域からも非行少年を多く出している」という文章を引用しながら、「従来の非行少年は、一般の少年と比べて比較的、素質または環境の条件に不利な要因(例えば、知能が低い、家庭の経済的な貧困、

欠損家庭、不良な特殊な地域、等々)があり、問題行動のない少年と区別し得る特長をかなり明確に持っていた。最近ではこの非行少年を特色づけるものがなくなっているのである。」と述べていた。廣井(2002)は、この時期を「貧困型非行」と規定しているが、その当時の専門家は、貧困によることを否定しているという点に注目すべきであろう。

また、伊藤(1963)の16年後、家庭裁判所に勤務していた郷古(1979)は、「少年非行の一般化(普遍化)現象」を「第1に、青少年犯罪を犯すものは、特殊な家庭環境、知能、性格の持ち主とはいえなくなった。」と述べている。

さらに80年代に入って、犯罪心理学者の森(1981)は「性格や家庭環境などの歪みの伴わない青年期非行がふえており」と述べ、「体感治安の悪化」が始まる以前から一貫して、一般化が近年生じたかのような指摘があったと言える。

5-b. マスメディアによる「一般化」言説

朝日新聞の見出しとしては、下記のようにわずかしは見出すことはできなかった。

1966.8.19 「凶悪犯 17歳が頂点 少年犯罪 中以上の家庭に広まる(犯罪白書紹介)」

1973.10.30 「女性犯罪、男性化 中流家庭に少年非行(犯罪白書紹介)」

考 察

結果は、おおよそ専門家についても、マスメディアについても、過去においてすでに凶悪化等の言説があったと言える。したがって逆説的に、1980年代終盤以降の体感治安の悪化は、マスメディアや一部の専門家の責任のみに帰することはできない。なぜならマスメディアも一部の専門家もある程度時代を問わず一貫して不安や恐怖をあおり、警告を発し続けてきたにもかかわらず、体感治安の悪化は、1980年代終盤以降になって初めて生じたからである。彼らは、過去においても、少年たちが「凶悪」で、「動機が不可解」で、「衝動的」で、「中流以上の家庭の出身」で、「メディアの悪影響を受けている」ことを「最近のこと」として語ってきた。

もっとも、結果からすれば、1970年代後半から1980年代前半については、凶悪化等の言説が少なかった可能性はある。だとすれば、体感治安悪化は、1960年代にも生じており、1970年代後半から1980年代前半に収束し、1980年代後半に再び盛り返してきたという可能性がある。しかし、小沢(2009)の調査結果からすれば、当時“体感治安の悪化現象”があったとは思にくい。この研究では下は高校生から上は70歳代の人まで、40年前と現在の少年によ

る殺人事件の件数の比較を7種の選択肢によるクイズ形式によって調査した。調査対象者のうち、当事者としての時代の雰囲気に対する記憶が残っている60歳代、70歳代を中心とする64名において、「現在の5倍程度」という正解を選択肢から選べた者が約8%（5名）、40年前の方が多かったという正解傾向の者でさえ約17%（11名）に過ぎなかった。調査後の問いかけにおいては、正解の者でもあてずっぽうであったり、クイズ形式を意識してあえて裏をかいたりという返答であり、現在のような社会現象としての体感治安の悪化が当時あったとは考えにくかった。

結局のところ、本研究の結果は、筆者がすでに問題・目的の項で指摘した通り、「時代と共に人々が繊細になった」という心理的变化（p160の（b））を体感治安の悪化の要因として注目すべきであるという結論を導くものである。過去は、少年による凶悪犯罪がなかった時代なのではなく（参照：少年犯罪データベース）、それを受け取る人々が鈍感でありえた時代なのかも知れない。

補足的議論となるが、なぜマスメディアに限らず専門家も不正確な評価を下すのだろうか。少年たちが「凶悪」で、「動機が不可解」で、「衝動的」で、「中流以上の家庭の出身」で、「メディアの悪影響を受けている」ことを「最近のこと」として語ることは、完全に事実と反するというわけではない。しかしながら、一方で思いつくのが比較的容易で、不安をあおる表現の組み合わせに過ぎない側面もある。専門家としての要件には正確性が含まれていると考えれば奇妙なことである。この点については、他の実証的な研究を待つべきであろうが、仮説を述べておきたい。専門家といっても、警察関係者については、予算獲得という明白な動機があるように思われる。凶悪化等の言説をあおることで、国家からは予算が付き、国民に対してより強い立場に立つことができる。すなわち合理的なプロパガンダと言える。

一方、精神科医、心理学者、家庭裁判所の調査官や少年鑑別所の所員など、人の特徴を見て取ることを専門とする人たちや非行少年たちと間近に接している人たちが、凶悪化等の言説をデータに基づいた特徴として述べている点には驚きを感じる向きもあろう。ただし、彼らとしても、犯罪の現場に居合わせたわけではなく、また記録映像を見るように、過去の少年犯罪と現在の少年犯罪を見比べたわけでもない。専門家といえども、記憶や証言、捜査結果等から事後的に事実を再構成しているに過ぎないのである。また、記録に残っていない部分については長い時間の経過による忘却や記憶の再構成もあろう。さらには、新たに受け取る情報に対して何十年という期間同じ感受性ではありえない。この情報入手経路の間接性、年月の経過による記憶の変質、自身の加齢による感受性の変化に不正確さが生じる契機があ

と思われる。もっとも、あえて弁護すれば、そのような錯誤がただちにその職業実践を妨げ、専門家としてのレベルを下げるとは必ずしも言えない。むしろ過剰な危機感をもって職務を行うことが専門家としての質を維持させるのかも知れない。

補足的議論のふたつめは、少年の社会における位置づけあるいは、青少年の発達に対する凶悪化等の言説の影響についてである。「最近の若者は・・・」という表現に始まる若年層批判は古代から幾度となく世界中で繰り返されているが（例えば、グラスナー、2004、p15）、近年の凶悪化等の言説の氾濫は、現代においても少年が、言論の世界においては、社会的弱者としてあることを示している。犯罪少年たちは、決して少年たちの代表者ではないのだが、凶悪化等の言説に一般化言説が含まれていることから、あたかも現代の青少年の特徴のように語られている。このことはそれなりの影響力を青少年に対して持つはずである。この点を今後の検討課題として挙げておくべきであろう。

要 旨

本研究は、現代の体感治安の悪化の構造を探るため、文献調査によって、一部の専門家やマスメディアによる凶悪化等の言説の歴史をたどった。その結果、凶悪化等の言説は、ある程度時代を問わず、専門家にもマスメディアにもあることがわかった。しかし体感治安の悪化は、あくまで現代の現象であるとされていることから、現代人が近年獲得した心理的な繊細さをも要因として重視すべきであろうと結論した。

おわりに

筆者の主たる専門は乳幼児の発達である。少年犯罪はその元凶を乳幼児期の教育に求められることがある（例えば、戴・大淵・石毛・山入端、2006）。したがって、少年犯罪研究は、乳幼児の発達研究である。「最近のふつうの子はキレて凶悪な犯罪を行う」というような子どもの育ちについて不安をあおる言説が家庭教育に悪影響を及ぼしていると言えるかどうかは現時点では不明である。しかし、凶悪化等の言説は、感情的にならずに考えたり、調べたりすることの大切さを大人たちで作っている社会が手本として子どもたちに示し得ていない例のように思われる。

利用データベース

朝日新聞データベース 聞蔵Ⅱビジュアルfor Libraries

少年犯罪データベース <http://kangaeru.s59.xrea.com/>

引用文献

鮎川潤 「少年非行とマスメディア」、『犯罪とメディア文化』有斐閣、1988年、69－109頁。

鮎川潤 『少年犯罪 ほんとうに多発化・凶悪化しているのか』平凡社新書、2001年。

板倉宏・沼野輝彦 「非行概念の変遷」、『ジュリスト』556、1974年、32頁。

伊藤幸恵 「少年非行の原因について」、『人文学報』30、1963年、119－135頁。

遠藤隆行 「戦後非行の第4のピークはくるのか—最近の少年たちの変化を考える 犯罪統計から」、『犯罪心理学研究』36、1998年、158-160頁。

大浦宏 「凶悪・特異な犯罪に至った最近の少年について—凶悪・特異な犯罪に至った近年の少年の鑑別に当たっての留意事項等について」、『犯罪心理学研究』42、2004年、189-192頁。

大橋薫 「少年非行のメカニズム-社会病理学的研究-」、『教育社会学研究』19、1964年、74-87頁。

岡本潤子 「戦後非行の第4のピークはくるのか—最近の少年たちの変化を考える 家庭裁判所の現場から」、『犯罪心理学研究』36、1998年、160-161頁。

小沢哲史 「少年犯罪増加（凶悪化）言説の実態 ～高校生、大学生、主婦、高齢者への殺人件数のイメージ調査を手がかりに～」『日本発達心理学会 第20回大会発表論文集』、2009年。

河合幹雄 『安全神話崩壊のパラドックス 治安の法社会学』 岩波書店、2004年。

グラスナー・バリー（松本薫訳）『アメリカは恐怖に踊る』 草思社、2004年。

郷古英男 「少年非行の現状と課題」、『犯罪社会学研究』4、1979年、2-28頁。

鈴木賀一郎 『少年少女犯篇』 中央公論社、1935年。

芹沢一也 「凶悪犯罪の語られ方」、『犯罪不安社会 誰もが「不審者」？』 光文社、2006年、75-132頁。

戴伸峰・大淵憲一・石毛博・山入端津由 「青少年犯罪の原因に対する一般市民と専門家の認知の比較」、『犯罪心理学研究』44、2006年、19-32頁。

高橋一郎 「少年犯罪凶悪化説の批判的検討 ～質的变化の観点から～」、『大阪教育大学紀要 第IV部門』53、2004年、135－149頁。

- 徳岡秀雄 「凶悪化言説と対策のジレンマ」、『季刊教育法』125、2000年。
- 内閣府 『社会意識に関する世論調査』2004年。
- 新田健一 「シンポジウム:犯罪・非行の質的变化とその対策」、『犯罪心理学研究』15、1978年、37-49頁。
- 野村総合研究所 『治安に関する意識調査』2005年。
- 浜井浩一 「犯罪統計はどのように読むべきか」、『犯罪不安社会 誰もが「不審者」?』光文社、2006年、15-74頁。
- 原房孝 『少年の犯罪とその予防』金港堂書籍、1921年。
- 樋口幸吉 「非行とは何か」、『講座少年非行1 実態と原因』明治図書出版株式会社、1968年。
- 廣井亮一 「子どもの攻撃性に関する一考察 一少年非行の現状を通して一」、『和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要』12、2002年、137-149頁。
- 広田照幸 「<青少年の凶悪化>言説の再検討」、『教育言説の歴史社会学』名古屋大学出版会、2001年、297-341頁。
- 福島章 「シンポジウム:犯罪・非行の質的变化とその対策 犯罪精神医学の観点から」、『犯罪心理学研究』15、1978年、37-49頁。
- 前田雅英 『少年犯罪 統計からみたその実像』東京大学出版会、2000年。
- 間庭充幸 『若者犯罪の社会文化史 犯罪が映し出す時代の病像』有斐閣選書、1997年。
- 森武夫 「今日の青年にとって非行とは何か—青年期危機非行論—」、『犯罪心理学研究』18、1981年、1-11頁。
- 森田宗一 『少年問題と少年法』有斐閣、1961年。
- 柳原佳子 「非行問題」のボーダレス化:「非行の拡大化」言説の点検」、『犯罪社会学研究』17、1992年、26-46頁。
- 山本晴雄 『映画の青少年に及ぼす影響』日本応用心理学会、1956年。
- 山本晴雄 「少年非行発生の条件」、『日本教育学会大会発表要旨録』20、1961年、75-76頁。